

「世界農業遺産」認定をめざして

第2回 モニターツアー企画

琵琶湖と共生してきた

“滋賀の農山漁村”の魅力を知る！



～ 豊かな湖づくりへの想いを“聞き”

「魚のゆりかご水田」の恵みを“味わい”そして

樹を育てて琵琶湖を守る「漁民の森づくり」を“知る” ～

記録集

日時 : 2017年9月7日(木) 9:00～17:00



「琵琶湖と共生する滋賀の農林水産業推進協議会」設立準備会

開催概要

滋賀がめざす「世界農業遺産」のことをより深く知っていただき、魅力的な滋賀の農林水産業を発信していくため、第2回目の「モニターツアー」を開催しました。

今回は、琵琶湖から田んぼに遡上したニゴロブナなどの湖魚が、田んぼで産卵し、稚魚が再び琵琶湖へ戻っていく、そんな豊かな生きものを育む「魚のゆりかご水田」の取組の説明や、琵琶湖の漁師さんによる森づくりの活動などについてお聞きいただきました。また、農山村で活動されている企業さんの取組についても御紹介し、琵琶湖から水源の森まで滋賀の農山漁村における生物多様性保全の取組について、企業や団体の皆様にとってのヒントが得られた1日になったと思います。

プログラム

1. 日 時:9月7日 (木)

2. 行 程

9:00 大津駅集合 (9:10 出発) 9:50 野洲駅集合 (10:00 出発)

(車中)「世界農業遺産」認定に向けた取組について

10:30 野洲市須原 せせらぎの郷

①現地見学(魚のゆりかご水田)

②野洲川歴史公園田園空間センター (ジオラマ見学)

11:30 昼食 (魚のゆりかご水田米“新米”や湖魚を使った料理)

お食事を楽しみながらの皆さんと交流

12:30 琵琶湖の魚と田んぼの話

①魚のゆりかご水田の活動 (せせらぎの郷)

②企業の地域活動 (積水化学工業 (株))

③大学生の活動 (龍谷大学)

④琵琶湖漁業の話 (琵琶湖の漁師さん)

15:00 野洲市大篠原 漁民の森

見学とお話 (琵琶湖の水と環境を守る会・野洲市農林水産課)

16:15 野洲駅解散 17:00 大津駅解散

3. 参加者:27名

主催:滋賀県・「琵琶湖と共生する滋賀の農林水産業推進協議会」設立準備会

野洲市須原 現地見学

今回のツアーのスタートは、野洲市須原。琵琶湖に隣接する農村地域で、「魚のゆりかご水田プロジェクト」に取り組まれている“せせらぎの郷”代表の堀様に現地を御案内いただきました。



魚のゆりかご水田見学 せせらぎの郷代表 堀 彰男さん

現在は、一面に田園風景が広がるここ須原ですが、昔は水郷地帯でした。今、農道が走っているこの場所にも、昔は大きな堀や川があり、また、この地域には大きな内湖が2つもありました。当時、田んぼへは、田舟を使って2~3時間かけて通り、もちろんお弁当を持参しての1日かけての農作業でした。須原は、昔から琵琶湖の恵みをしっかり受けて、生きものと田んぼに育てられてきた地域なのです。

昭和47年から、ほ場整備事業が始まり、今のような効率の良い耕作ができるようになりました。農業用水も琵琶湖の水を利用してポンプで汲み上げるようになり、バルブを回すだけで水管理も非常に楽になりました。もともと、この地域の田んぼは、琵琶湖の水位とほぼ同じ高さで、非常に緩い湿田で耕作がしづらく、大型機械も入れない状態でしたが、田んぼを1m以上かさ上げしたことで、湿田から乾田に切り替わり、大型機械が入れるようになりました。農業の生産性を上げることができるようになり、農家にとって非常にありがたいことでした。



一方、このことで生態系が大きく崩れる結果となってしまいました。これまで、生きものに支えられ、農作業の中での魚つかみや魚釣りが、生活を支えてきましたが、琵琶湖のフナやコイが産卵・生育していた田んぼが、御覧のように段差ができてしまい、田んぼに全く入れなくなりました。

なんとか、もう一度、田んぼに魚を呼び戻そうと取組を始めたのが、平成 20 年度で、今年でちょうど 10 年目になります。昔ながらの産卵・繁殖の場を作ることが、この「魚のゆりかご水田プロジェクト」なのです。

昔からいたタニシも、農薬を減らしたお米作りをやっていいますので、ずいぶん増えてきました。稚魚が田んぼで泳いでいますので、白鷺も多いですね。

魚のゆりかご水田では、農薬は 1 回しか散布しません。減農薬・減肥料の環境にやさしい滋賀県のこだわり栽培です。また、無農薬栽培している田んぼもあります。今は雑草が目立たないですが、実は全て人力で取り除いています。大学生や都市住民の皆様の応援をいただいて、取り組んでいます。

4 月 20 日前後から産卵が始まりますので、それまでに魚道を設置します。産卵時期になると、魚は浅瀬へと遡上してきます。田んぼから流れ出る微生物を食べに必ず魚が寄ってきます。

田んぼに湖魚が上がりやすいよう、大きさが異なる堰を順番に取りつけ、田んぼの高さの水位まで、堰を上げています。親魚がジャンプする高さが約 10cm と言われており、10cm 単位の水位で堰上げていきます。さらに堰板には、水の流れが速くなるよう V 字の切り込みを入れ、より魚が登りやすくなるよう工夫しています。魚道は、4 月から 6 月の田んぼの中干しの時期まで、御覧いただけます。



黄色い人形は、ヴォワイアンと言います。フランス語で“見つめる人”。成安造形大学の先生が、どうしても魚のゆりかご水田に置いて欲しいということで、数年前から「須原のゆりかご水田」を見えています。田んぼを見つめているので、「田んヴォワイアン」と呼んでいます。青とか赤とか全部で六十数体あり、今はほとんどが九州にあるようですが、滋賀県にはここともう 1 箇所 2 体だけあります。



野洲川歴史公園田園空間センター

次に訪れたのは、「野洲川歴史公園田園空間センター」です。当日予定していた昔ながらの手刈りによる稲の収穫体験が、小雨の影響で中止になったため、当施設に常設展示されている魚のゆりかご水田のジオラマを見学しました。



滋賀県では、湖魚が琵琶湖と田んぼを行き来できるように水路に魚道を設置し、湖魚が産卵、成育できる水田環境を取り戻す取組である「魚のゆりかご水田」を、平成18年度から推進しています。このジオラマは、これまで、PRイベント等の開催時のみ活用していましたが、もっと多くの方々にこの取組を知っていただくため、取組をわかりやすく紹介するジオラマを今年度から常設展示しています。

野洲川歴史公園田園空間センター 総合案内展示室

住所：滋賀県野洲市堤 2726 番地

利用時間：午前10時～午後3時

休業：毎週火曜日と祝日等の翌日および年末年始（12月29日～1月3日）

入館：無料

野洲市須原 憩の家にて

次に、野洲市須原の集落にある“憩の家”へ移動しました。

ここでは、須原せせらぎの郷の皆様による手作りの昼食を頂きながら、ツアー参加の皆さんとの交流、そして午後からのプログラム“琵琶湖の魚と田んぼの話”についてご説明いただきました。



ご用意していただいた本日の昼食は、今年穫れたての“魚のゆりかご水田米”の新米（コシヒカリ）、湖魚料理は、琵琶湖の宝石ビワマスの佃煮、琵琶湖で一番小さい魚ウロリの佃煮、シジミ汁、そして堀様手作りのお漬け物です。また、鮎ずしもご用意いただきました。



また、お食事の準備をしていただいた“せせらぎの郷”の皆様の紹介をはじめ、ツアー参加者の自己紹介、琵琶湖や世界農業遺産認定を目指した取組への想いなどについて発表し、交流を深めました。



お世話になった野洲市須原せせらぎの郷の皆様

魚のゆりかご水田プロジェクトについて

せせらぎの郷代表 堀 彰男さん

ようこそ須原へお越しいただきました。“せせらぎの郷”というのは、環境保全の取組団体の名前で、実際の地名は野洲市の須原です。この取組も早10年になります。

この地域の昔と今の違いですが、もともとは水郷地帯で農業も田舟を使って行っていました。今は、フナ、ナマズ、コイぐらいしか見かけませんが、当時は、様々な生きもの見られ、魚つかみをして、それをおかずにしてと、今では懐かしい思い出です。

集落内でも綺麗な水が流れ、生活用水にも利用していましたが、今は、道路になっています。

琵琶湖の生きものによって支えられてきた生活が、琵琶湖総合開発により安全で便利な世の中になりました。一方、川や琵琶湖との関わりが薄くなり、身近な生きものの価値や環境に気付くことが難しくなりました。そこで、もう一度自然に触れ、自然の持つ価値を後世につなげたい、琵琶湖との関係を取り戻したいということで、この活動を始めたところです。

魚道の仕組みですが、堰上方式と呼び、琵琶湖の水位から約10cmずつ高さを上げて、水位を田んぼの高さに合わせています。雨が降ると、湖魚たちは喜んで遡上してきます。何十、何百の湖魚が、どんどん飛び上がってきます。4月、5月の雨が降った翌日の朝に現地に来ると、見るができます。



また毎年、生きものに配慮した田植え体験を実施しています。魚のゆりかご水田オーナー制度も導入し、今年度も遠くは東京からなど8組の方に新たに御入会いただきました。

さらに、6月になると生きもの観察会や環境学習会を開催し、子どもたちなど多くの方に参加いただいています。

6月の中干しの時期、田んぼでどれだけの稚魚が育ったのかを調べるため、生きもの流下調査も実施しています。こうしたことで、水田生物の多様性の価値・命の循環について、皆様と共有できればと思っています。また、9月には稲刈り体験会も実施しました。自分たちの食べる食材について子どもたちにも教えていただく機会となるよう、毎年実施しています。

魚のゆりかご水田では、滋賀県の条例の環境こだわり栽培に準じて、生きものが生育に問題のない農薬、肥料を散布しています。慣行栽培の半分以下の使用量です。さらに環境のことを考えた取組として、今年で3年目になりますが大学生に除草作業の応援をいただきながらの「無農薬無化学肥料栽培」も実施しています。

魚のゆりかご水田のPR活動としては、東京での情報発信や、学校教育との連携として小学校への出前講座や大学生のインターンシップ受入などを行っています。さらに、伝統食の継承として、鮎ずし漬けの会も開催しています。



6次産業化として、日本酒造りにも取り組んでいます。普通は酒米で造るのですが、コシヒカリのみで純米吟醸酒を造っています。この“月夜のゆりかご”は原酒ですので、アルコール度数は高めの18%ですが、非常に飲みやすく仕上がっています。2014年のココクールマザーレイク・セレクションにも選定いただきました。



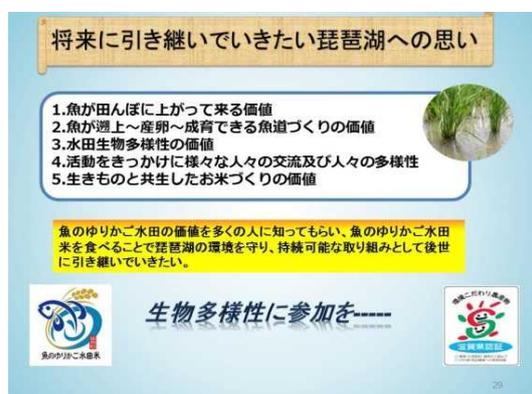
おかげさまで、おとしになります、この地域が“ディスカバー農山漁村（むら）の宝”に選定いただきました。表彰式には、安倍首相ともお話をさせていただきました。本当に、地域の皆様、御支援いただいている皆様のおかげだと思っています。本当に感謝申し上げます。



また昨年度には、環境大臣優秀賞を受賞させていただきました。この取組のストーリー性を高く評価いただいたの受賞です。そして海外には、生物多様性条約第12回契約国会議（COP12）や、第16回世界湖沼会議にも参画させていただきました。各国の皆様の前でゆりかご水田を披露できたことに感謝しています。



最後になりますが、魚が田んぼに上がってくる価値や生育・産卵できる価値をしっかりと将来に引き継いでいきたいと思っています。そして、魚のゆりかご水田を多くの人に知っていただき、ここで獲れたお米を食べていただくことで、琵琶湖の環境を守る持続可能な取組になると思います。地域の皆様にとっても、本当に取り組んで良かったと思っただけのようになれば幸いです。



工場の部材を有効活用した琵琶湖の生物多様性保全活動

積水化学工業株式会社 滋賀栗東工場 藤本 浩司さん

私ども企業に取り組んでいる環境活動についてお話しします。

積水化学工業は、主にプラスチック加工メーカーです。皆様にお馴染みがある製品としては、セロテープやポリバケツを日本で最初に作った会社です。現在は、セキスイハイムなどのユニット住宅や、例えば自動車のフロントガラスの中に挟んである特殊なフィルムや真空採血管といった高機能プラスチック、塩ビ管など樹脂を使ったパイプなどを製造しています。



滋賀栗東工場では、塩ビ管やポリエチレン管、合成木材等を製造しています。魚のゆりかご水田に関係するのが合成木材になります。ガラス繊維とウレタン樹脂の発泡体できており、見た目は木で、重さもほとんど木と同じです。木の違いは、水を吸わないため腐食や膨張することがなく、経年劣化しない特性があります。鉄道のまくら木などに使われています。使い方は、木材と同じように切ったり、貼り付けたりなど様々な形に加工・組立ができるのですが、一方で加工時に端材が多く出ます。これを何とか環境活動に活用できないかと考えたことが、魚のゆりかご水田プロジェクトに参画するきっかけになりました。

3. 生物多様性保全活動の背景(工場部材の活用) SEKISUI 7

3-1. 積水化学工業(株) 滋賀栗東工場の製品

・積水化学工業(株) 滋賀栗東工場では、「水環境ビジネス」に関わる、塩ビパイプ、老朽化した下水道を更生する更生管、給水・給湯用架橋ポリエチレン管、合成木材(FFU)、下水道用FRPM管、等の製造を行っています。

<p>塩ビパイプ群</p> <p>HT管、HT管、耐火P、ACTレン、リフパイプ</p>	<p>更生管製品群</p> <p>SPR、オメガライナー</p>	<p>ポリエチレン管製品群</p> <p>SMTX、ベックス、ポリエチレン管</p>
<p>FRP(ガラス繊維強化プラスチック)製品群</p> <p>FFU、FRP継ぎ目板</p>	<p>FRPM管群(ガラス繊維強化樹脂樹脂管)</p> <p>RCP、トップシャフト</p>	

SHIFT 2019 - Fusion - SEKISUI CHEMICAL GROUP 3

この端材の活用方法について滋賀県に相談し、県内3地区と活動を実施しました。たかしま地区では、木製の魚道は、どうしても経年劣化し、作り替えは農家さんにとっても大変な負担となり、費用も労力もかかりますので、地元の方と一緒に、工場の端材を活用した合成木材の魚道を作りました。

4. 滋賀県「魚のゆりかご水田」プロジェクトの参画活動 SEKISUI 7

4-4. 工場端材を活用した「魚道」の設置推進(たかしま地区)

経年劣化した魚道(木製)、設置位置の確認、魚の瀬上、設置高さの調整、固く杭打ち、作業完了集合写真、FFU製なので、経年劣化心配無し! フナの瀬上げも確認!

SHIFT 2019 - Fusion - SEKISUI CHEMICAL GROUP 15

同様に、栗見出在家地区でも材料を提供し、魚道の製作・設置を行いました。一筆魚道とは、排水路の幅が広くて堰止めることが難しい場合に、田んぼごとに設置する魚道です。

他にも、内陸部になりますが甲賀の小佐治地区で生きものを育む水田内水路の設置や、ここ須原でも、今年から一緒に取り組んでいます。

材料を提供するだけでなく、会社の従業員やその家族に自然に触れてもらう機会を提供しようということで、田植えや観察会、稲刈りに参加させていただき、社員の環境保全の意識を高める取組も行っていきます。

さらに、工場内においても活動内容を知ってもらうために、収穫されたお米を食堂で提供するとともに、クイズ企画などで関心を高めています。

現在、ここ須原地区を含め、県内4地区で活動を行っており、今後も広めていきたいと考えています。

このような企業の環境活動で評価もいただいております。環境省主催の「グッドライフアワード」にて特別賞、日本自然保護協会主催の「日本自然保護大賞」にて大賞、そして昨年には「しが生物多様性大賞」にて大賞を受賞し三日月知事より賞状をいただきました。

少しずつですが、魚のゆりかご水田の活動に参加し、お手伝いしながら、これからも皆さんと共に環境活動に取り組んでいけたらと思っています。今後もよろしくお願ひします。

4. 滋賀県「魚のゆりかご水田」プロジェクトの参画活動 **SEKISUI 70**

4-4. 工場端材を活用した「魚道」の設置推進(東近江市栗見出在家地区)
 ・2015年3月、魚道の「堰板」、及び「一筆魚道」をFFU部材を提供し、地域農家と協働して製作・設置を実施しました。
 (栗見出在家ゆりかご水田協議会、滋賀県農林振興課と共同で実施)



SHIFT 2019 Fusion- SEKISUI CHEMICAL GROUP 11

4. 滋賀県「魚のゆりかご水田」プロジェクトの参画活動 **SEKISUI 70**

4-5. 環境学習活動への参加
 ・滋賀県東工場で、東近江市栗見出在家地区の5区画(500m²)を借り受け、「ゆりかご水田オーナー」として、生物多様性保全活動に参加しました。



SHIFT 2019 Fusion- SEKISUI CHEMICAL GROUP 11

4. 滋賀県「魚のゆりかご水田」プロジェクトの参画活動 **SEKISUI 70**

4-6. 場内での情報発信(ゆりかご水田フェアの実施)
 ・10月19日~23日 工場内にて「ゆりかご水田フェア」実施し、「ゆりかご水田プロジェクト」活動の展示及び紹介ビデオを放映し、活動を従業員にPRしました。



SHIFT 2019 Fusion- SEKISUI CHEMICAL GROUP 11

6. 外部評価 **SEKISUI 70**

・2016年3月15日 滋賀県・滋賀経済同友会主催の「しが生物多様性大賞」にて「大賞」を受賞。



三日月知事より賞状を授与
 副賞:長浜黒壁ガラス記念品

SHIFT 2019 Fusion- SEKISUI CHEMICAL GROUP 11

ゆりかご水田における学生の活動と学び

龍谷大学大学院 政策学研究科 赤松 喜和さん

今日は、須原の魚のゆりかご水田で、学生もお手伝いしているということを皆様にお話させていただきます。よく“ヨシカズ”さんと、男性に間違われることが多いのですが、“喜和”と書いて“きわ”と言います。よろしくお願ひします。

今年の4月から、大学近くの市民農園を借りて畑を始めましたが、毎日の水やりをサボってしまうとすぐに枯れてしまうので、やっぱり農業は難しいですね。



大学での研究のテーマは、環境保全型農業実践農地における環境直接支払いの効果検証で、無農薬栽培や減農薬栽培を実践している農家さんに対して、いくつか補助金が行政から出ていますが、それについて研究しています。滋賀県の魚のゆりかご水田プロジェクトを事例として堀様に色々とお話を伺っています。その関係で、魚のゆりかご水田米づくりのお手伝いをしています。

私以外にも、龍谷大学生が授業などで訪問させてもらっています。その一つに「里山学」の授業があり、里山の環境や動植物や歴史と人間の関わりについて学ぶもので、ここ須原をフィールドに約40名が、生きもの調査や中干し時期の流下調査を行いました。他には、「海外実践探求演習」というものがあり、先進事例として須原のゆりかご水田の取組を学び、無農薬水田での手押し機械を使った機械除草や生きもの調査、勉強会に約20名が参加しました。



講義に参加した学生からは、水田・水路にたくさんの生きものがいることに驚いたこと、滋賀出身でも鮒の遡上について知らなかったこと、一見昔と変わらない田園風景の中に環境が変化している問題があることや、農家の支えによって自然が守られていることなど、新たな気づきが次々と挙げられました。

今年4月からの私自身の魚のゆりかご水田での活動記録ですが、まず育苗を行いました。一般的には、苗を購入して田植えを行うそうですが、堀様の田んぼでは、種まきから行い、苗を育てていますので、そのお手伝いをさせてもらいました。

5月は、機械除草です。手押しの機械で田んぼの土を混ぜて、草を生えないようにするのですが、結構力が必要で、田んぼの中なので足がおぼつかなく、かなり難しい作業だと思いました。

7月には、枝豆植えや鮎ずし漬けを体験させてもらいました。実は、鮎ずしを一度も食べたことがなかったのですが、食べてみると、においもきつくなく、美味しかったです。また、最近では、魚のゆりかご水田のオーナーさんや地域の方々と一緒に、手刈りでの稲刈り体験を行いました。

最後に、この4月からの活動を通して感じたことですが、田んぼ、水路、畔は、単にお米を作るだけの場所ではなく、そこには、フナ、ナマズなど、多くの生きものの生息しており、非常に価値があると思います。そして、魚のゆりかご米は、琵琶湖の固有種であるニゴロブナを保全するための重要な要素です。消費者にとって無農薬・減農薬栽培は良いものですが、実践してみると本当に大変な作業で、これを趣味ではなく生業として継続することは非常に難しいと感じました。スーパーで売っているお米と違い、生産者がどういった過程で、どういった想いで作ったかを知って食べることで、より一層、環境や農業に貢献できるのではないかと思います。

堀様やせせらぎの郷の皆様が、積極的に活動をされているのを見て、今以上に多くの方に魚のゆりかご水田米を食べてもらうにはどうしたらいいのか、自分なりに考えているところです。

私の活動記録

日付	活動内容
4月23日	育苗 種を蒔き、10cm程度まで苗を育てる。水やりを1日2回行う。
5月27日	機械除草 完全無農薬栽培の田んぼで、手押し機械を使って除草する。足元がおぼつかない中で、前に進むのが難しい。力のいる作業。
7月10日	枝豆植え 水はけが良い畦に植え付ける。
7月29日	鮎ずし漬け 滋賀県の伝統食の鮎ずしを漬けることに挑戦。樽の中に白ご飯と鮎ずしを層にして重ねていく。
9月2日	稲刈り体験 ゆりかご水田のオーナーさんなど、県内外からたくさんの人と一緒に鎌で稲を刈る手刈り体験。



美しいびわ湖を取り戻すために

NPO法人家棟川流域観光船 松沢 松治さん

私は琵琶湖の漁師です。漁師を始めたのは1967年で、ずいぶん昔になりますが、その頃の琵琶湖は、原風景そのもので、何千年前の風景がそのまま残っていました。当時は、魚、貝類がいるいないは、感じたことがありませんでした。琵琶湖に行けば何でもいるのが当たり前でした。環境の“かの字”も考えたことがありませんでした。

喉が渴けば琵琶湖の水を飲んで、お昼になったら琵琶湖の水でお茶を沸かしての生活でした。私は原風景が残った琵琶湖でシジミ採りをしていました。その頃の琵琶湖では、魚をとる人、エビを捕る人など、1種類だけの漁で1年間の生計を立てることができました。



先程の堀さんの話にもありましたが、琵琶湖総合開発によって、周囲のクリーク地帯であった堀、川、池が全て無くなりました。これが全ての原因とは申しませんが、琵琶湖の原風景が壊れてきたのがこの時期です。琵琶湖の生きものも相当変わってきて、だんだんと漁業者も1種類の漁だけでは食べていけなくなりました。そして、1977年に琵琶湖で赤潮が始めて発生しました。漁をやっていると突如として琵琶湖の真ん中が赤くなりびっくりしました。その後にはアオコも発生しました。アオコは、一時期はなくなりましたが、最近もまた見られるようになってきました。

野洲市には、野洲市を源流として野洲市内だけを流れている一級河川家棟川があります。この川をターゲットにして、環境問題に取り組んできました。

15年前になりますが、その当時の家棟川の状況は、不法投棄されたゴミが散乱し、これが琵琶湖に出ると大変だということで、人力、船を使って回収を行いました。

しかしながら、大勢の人たちで、大変な労力をかけて3年間取り組みましたが、不法投棄が後を絶えない状況でした。

● 清掃活動によるごみ回収

人力、船を用いての回収、大変な労力



船による不法投棄ごみ回収

そこで視点を変えて、多くの人に川の現状を見ていただき、啓発をしようということで、エコ遊覧船を家棟川で運行することを始めました。まずは、地元の自治会長や役員さん、幼稚園児や小学生に乗ってもらい、川の美しさやゴミの啓発を行いました。3年ほど続けましたら、さすがにゴミの量が減ってきました。船の運航によりゴミが減ってきて、やっであ良かったということで、子どもたちに船のこぎ方を教えたり、老人会事業との連携をしたりしながら、河川への関心を高めてもらうために運航を続けました。

こういった環境活動には多くの人々の協力が必要ですので、市の環境基本計画の策定に関わり、市民・団体・企業・行政の協働によりプロジェクトを作っていました。そのプロジェクトの一環として、あやめ浜まつりを開催し、シジミ採りなど琵琶湖に親しむ取組を開催しています。

また、河川への関心を高める取組として、投網漁や刺網漁による生態調査を兼ねたエコ遊覧や、びわ湖の景観と生態系の保全活動としてヨシ植えイベントの開催、そして後ほど現地を見ていただく“漁民の森”での植樹活動に取り組んでいます。

環境保全は、市民、自治会、行政などが協働で取り組むことで、地域全体で推進できるようになり、川や湖がきれいになることで、身近な環境への関心が高まり、生きものが増え、子どもから大人まで自然に親しむようになると思います。

●河川への関心を高める

地域の子ども会との連携



大人、子どもの櫓こぎ体験

●プロジェクトの取り組み

びわ湖に親しむ取り組み —あやめ浜まつり—



恒例事業となったあやめ浜まつり

しじみ採り体験に大人も子どもも夢中

●プロジェクトの取り組み

びわ湖の景観と生態系の保全活動 —ヨシ植えイベント—



市民、企業、行政等の協働作業

ヨシを植える子どもたち

●プロジェクトの取り組み

びわ湖の水源を守る植樹活動 —漁民の森づくり—



水源の山に植樹し整備する大人や子ども

漁民の森づくり

最後に、野洲市大篠原の“漁民の森”へ移動し、びわ湖の水源を守る植樹活動についてお話を伺いました。

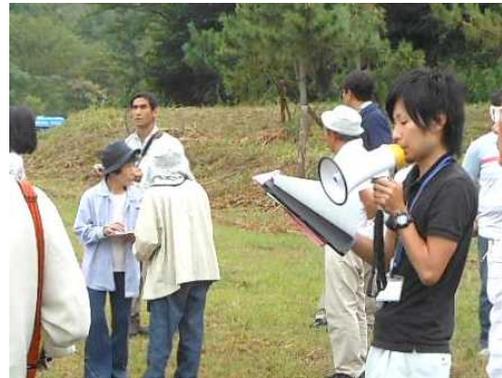


漁民の森づくり事業について

野洲市農林水産課 松尾 英哉さん

皆さん、こんにちは。漁民の森づくり事業についてお話をさせていただきます。

この漁民の森づくり事業は、ご覧のとおりですが、平成18年度から植樹を行ってきています。事業の目的ですが、ここ大篠原の里山でボランティア活動を通じて、地域住民の森林保全への理解を深めると共に、語らいや憩いの場となる森の整備を目指して、実施しています。御参加いただいている方は、漁業に従事されている方や林業に従事されている方を中心に、地域住民や企業、ボランティアの皆さん、そして行政機関が協力して行っています。これまでに、延べ1,800人の参加をいただき、延べ8.5haの植樹活動を行ってきました。



そもそも、なぜ“漁民の森”というタイトルが付いているかですが、琵琶湖には様々な川から水が流れており、川の源流は、こういった山々から流れ出る水が起源となっています。つまり琵琶湖の保全には、山々がきちんと整備され

ていることが重要ということで、琵琶湖の保全活動の一環として、植樹活動を行ったことが始まりです。

植樹によって植えられている木の種類ですが、コナラが多く植えられています。コナラは、成長すると椎茸の原木に使えるなど、資源の循環につながりますので多く植えられています。また、琵琶湖ではヨシの植樹が行われていますが、植樹後に沖合に苗が流出するのを防ぐために、波の力を和らげる消波堤の材料として、野洲で育てられた木の間伐材が利用されています。

植樹は、これまでに延べ 5,600 本が植えられました。しかし、植えられた木の全てが順調に育つのは中々難しく、イノシシなどの野生動物に掘り起こされたり、自然に枯れてしまったりということもあります。このように難しいことではありますが、植樹活動を長い間続けていくことで里山の保全、ひいては琵琶湖の保全につなげていくことが重要だと考えています。今年度もこの漁民の森づくり事業について、冬場の開催を検討しています。この話を聞いていただき、興味のある方は、ご参加いただければと思います。

漁民の森づくりについて

琵琶湖の漁師 松沢 松治さん

野洲町は山があつて湖が無く、中主町は湖があつて山がありませんでした。その 2 つの町が合併した折りに、それを機会に、森林組合と漁業組合が一度話し合いをしたことが、この漁民の森づくりのもともとの始まりになります。

浜でバーベキューをやりました。その時、山は大変だという話を聞き、漁師も一度山に行ってみようということがきっかけになりました。

琵琶湖の水は山から。山の一滴の水が琵琶湖を良くしていくという観点から、当時の森林組合長が、野洲の山もヒノキやスギばかりなので、広葉樹を植えようというのが、この植樹活動の始まりです。



第 1 回目の植樹を県に提案し、予算をいただくことが決まり、琵琶湖中の漁師を集めて話をしました。漁師の中からもそれは良いことだということで、初年度は、高島と野洲の 2 箇所で行いましたが、高島ではシカによる獣害が

ひどかったため、2年目からは琵琶湖中の漁師が全てここに寄って行うようになったという経緯があります。

植樹場所は、森林組合が子供たちを集め、勉強会をされている所や谷など、森林組合の方にお任せしています。この付近は、すごく広い茅場で、もともとから木が無く、イノシシの住処だった所です。我々も楽しみが欲しいと言うことで、8年ぐらい前に丹波栗を植えました。中々実りませんでした。しかし、今年見たらたくさんの実を付けており、また一つ喜びが増えました。



近年はコナラなど、ドングリの木の植樹が一番多いのですが、この葉っぱが積もり、腐葉土が積もり、良い水が川から琵琶湖へと行くことを私たちは願いながら、毎年汗をかきながらやっています。今年度も、3月に植樹を開催することになると思います。興味のある方は、1本でも植えに来ていただければと思います。またどうぞ、いらして下さい。



御参加ありがとうございました。